metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by
provided by Wakayama University Academic R

翻訳

ユカギール人（上）(1)

―― W. ヨヘリソンのユカギール民族誌より ――

From Waldemar Jochelson's Yukaghir Ethnography (1)
— An Annotated Japanese Translation of a Chapter —

遠　藤　　史
Endo,　　Fubito

ABSTRACT

This is an annotated Japanese translation of "The Yukaghir Tribe" by Waldemar Jochelson (Chapter 2 of his Yukaghir ethnography, *The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus*, Leiden: E. J. Brill, 1926). The ethnography is the achievement of Jochelson's extensive fieldwork on the Yukaghir in Northeast Siberia conducted in the years 1895–96 and 1901–02. Since many features of the traditional culture of the Yukaghir have been forced to change or even lost owing to cultural, political and economic circumstances since his time, the translator believes that

（1）［訳者注］本篇は民族学者 Waldemar Jochelson（1855–1937）によるユカギール民族誌 *The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus, The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History*, Volume IX, Leiden: E. J. Brill, 1926（『ユカギール人とユカギール化したツングース人』）の第 2 章（"The Yukaghir Tribe", pp.16–47）の翻訳である。ただし今回は紙数の関係で一部を省略して訳出する。ヨヘリソンは帝政ロシアに生まれ，革命運動参加によるシベリア流刑の中で民族学に目覚め，やがてアメリカ自然史博物館の Franz Boas が主宰する the Jesup North Pacific Expedition（1897–1902）にも参加してユカギール人やコリャーク人の民族学的フィールドワークを行った（その後は 1922 年にアメリカ合衆国に移住し，そこで没した）。その大きな成果が上記の著書であり，ユカギール人に関して言えば，現在までにまとめられた唯一の包括的な民族誌である。ヨヘリソンが現地調査を行ったのは 1895–96 年と 1901–02 年であり，それに基づく記述はもちろん，近代化された社会に暮らす現在のユカギール人文化とは異なるところがある。しかし収められた豊富な資料は，近代社会との接触がより少なかった時代のユカギール人の文化・社会を私たちに知らせてくれるものとして，現在でも紹介に値すると思われる。

this chapter, depicting traditional lifestyles of the Yukaghir soon after their "first contact" with modern civilization, deserves translation into Japanese even today. Several paragraphs are omitted from the translation due to space limitations.

名称—この民族は自らを「ユカギール」(Yukaghir) という名では呼ばず，誰がこの名を彼らに与えたかを知らない。しかし，17 世紀の早い時期にこの民族と初めて出会ったコサック—シベリアの征服者—の報告書においては，彼らは「ユカギール」と呼ばれていた。語尾「ギール」(ghir) から判断すると，この単語はツングース語起源にちがいない。アムール川および他の地域に居住するツングース人氏族の名が同様の語尾を持っているからだ。たとえばオロチョン人の中には，Kindighir, Bayaghir, Nikaghir, Iglaghir および Tuluyaghir のような氏族名がある。(2) ヤクーツク州のツングース人の中にも同じ名称の氏族が見つかる。アムール川沿いには「サマギール」(Samaghir) という名のツングース人がいる。それゆえ「ユカギール」という単語がユカギール人のツングース語名であり，ロシア人の侵略者がこれをツングース人経由で借用したことは十分考えられる。もし「ユカ」(yuka) を「ユカギール」という単語の語幹（明らかに ghir は接尾辞）と考えるなら，それはユカギール語では「遥かな」「遠い」を意味することになろう。

もちろん，単に音の類似という理由だけで，「ユカギール」という単語の「ユカ」が，「遠い」の意味のユカギール語の単語「ユカ」であると断言することはできない。このことを証明するのは難しい；アムール川流域のツングース氏族の名もまた Yukaminka や Yukamisi のように「ユカ」で始まることを考えればなおさらである。(3) それゆえ「ユカ」—単語「ユカギール」の語幹—もまたツングース語起源である可能性は十分あろう。その上，ロシア人は「ユカギー

(2) С. Патканов, Опытъ географіи и статистики тунгусскихъ племенъ сибири [S. Patkanoff, Essay on the Geography and Statistics of the Tungus Tribes of Siberia], Vol. I, Part I, pp.14－19 (Memoirs of the Ethnographical Section of the Imperial Russian Geographical Society, St. Petersburg, 1906) を参照。

ル」という単語をヤクート人から学んだかもしれない。ヤクート人は，その意味は知らなくても，この単語を依然として使っている。つまり，ヤクート人は北極光を Yukaghir-otto（「ユカギールの火」）と呼ぶし，ヤクート語での「ユカギール」の複数形は Yukaghirder である。トレチャコフという名のコサックが，ビリング探検隊の秘書官であるザウアー氏に，「ユカギール」という単語が，あるユカギール人戦士の名から派生したのだとほのめかしたことをここに書き足しておくことは興味深い[(4)]。ユカギール人は自らを「オドゥル」（Odul）と呼ぶが，このことは彼らが様々な氏族間に結ばれる民族の絆をはっきりと認識していることを示している。「オドゥル」は「強い」「力強い」という意味である。これは，「強い」を示す語幹 at から作られた動名詞だ[(5)]。ユカギール人はこの「オドゥル」という名の起源を，彼らの祖先が北東シベリア全域で最も強い戦士であると考えられていたからだと説明する。語幹 at からはもう 1 つの単語 adil が派生されるが，こちらは「若者」「若い男」そして「恋人」の意味である。母音を替えることによって（この交替はいわゆる「母音調和」に基づく[(6)]），1 つの語根から 2 つの異なった概念が派生されることは興味深い[(7)]。ザウアー氏の述べるところでは，ユカギール人は誰がこの名を彼らに与えたかを知らないということであるが，彼はまた，ユカギール人が自らを「アンドン・ドムニ」（Andon Domni）と呼ぶとも述べている[(8)]。これは明らかに Odud-omni を不正確に記録したものであり，その意味は「ユカギールの人々」である。「オ

（3）同書 II, p.57.

（4）Sauer, An Account of a Geographical and Astronomical Expedition to the Northern Parts of Russia, London, 1802, を参照。

（5）［訳者注］訳者自身の現地調査では，Odul に関するこの形態論的な説明は必ずしも支持されない。母音調和による交替形という考えも，ユカギール語の一般的な類型にはなじまないように思われる。

（6）Jochelson, Yukaghir Grammar, American Anthropologist, 1905, p.373. を参照。

（7）オモロン・ユカギール人は adil（「若者」）の代わりに andil と言う。このためコリマ川下流のロシア化したユカギール人やロシア人入植者は―のちに言及するが―彼らの恋歌を andilshtchina と呼ぶ。

（8）Sauer, p.61 を参照。

ムニ」（omni）は「人々」を意味する。コリャーク人はユカギール人のことをAtalあるいはEtelと呼ぶということを見てきた[9]。同じ名は，チュクチ人も彼らに与えている[10]。概してどの民族でも，隣り合う民族に対して自分たちなりの名を作り出すものだが，この場合，コリャーク人やチュクチ人によるAtalあるいはEtelという表現は，単にユカギール語の単語Odulであろう。コリャーク語やチュクチ語には子音dが欠けているためにユカギール語のdがtに変わり[11]，さらに母音oとuがチュクチ語に備わっている2種の語幹に従ってaとeになったのである[12]。シュテラーは，コリャーク人がユカギール人のことをアテリュ（Atelju）と呼び，カムチャダール人や千島列島人がユカギール人のことをアテリデ（Atelide）と呼んだと述べている。atalあるいはetelがこれら2単語の語幹を成しており，シュテラーの指摘するateljuという形が疑いもなくその複数形であることがわかる。コリャーク語ではatalとetelの複数形はa'talūとe'telōである。コリャーク語では「ユカギール人の女」はataliñaであり，その複数形はataliñawuである。

クラシェニンニコフは，コリャーク人がユカギール人のことをedel（эдэлъ）—彼によれば「狼」の意味—と呼んだと述べている[13]。けれどもコリャーク語では「狼」はe'gilñinで示され，ユカギール語では，コリマ方言でko'diel，ツンドラ方言でko'rielである[14]。

コリャーク人とチュクチ人はatalあるいはetelという名をチュワン人（Chuvantzy）にも与えている[15]。このことが示すのは，チュワン人は独立した

（9）Jochelson, The Koryak, 本叢書のVol.VI, p.428を参照。

（10）Bogoras, The Chukchee, 本叢書のVol.VII, p.19を参照。

（11）Bogoras, Materials for the Study of the Chukchee Language and Folk-Lore collected in the Kolyma District （edition of the Imperial Academy of Sciences, St. Petersburg, Part I）を参照。

（12）同書p.275。

（13）Krasheninnikoff, II, p.7.

（14）［訳者注］現在ではこの2つの「方言」はより独立的に、それぞれ「コリマ・ユカギール語」（Kolyma Yukaghir）と「ツンドラ・ユカギール語」（Tundra Yukaghir）と呼ばれることが多い。

民族を構成していた（このように考えた旅行者も何人かはいたが）のではなく，むしろユカギール人の1つの分派であるということである。

この機会に，チュワン人がユカギール人の一部を成していたことを示す他の証拠をあげてみよう。現在チュワン人は，（コリマ川やアナディル川沿いでは）ロシア人化しているか，あるいはコリャーク人やチュクチ人の多大な影響下にある。後者にトナカイ遊牧のチュワン人があり，コリャーク人に混じってペンシナ川の谷を遊牧しているか，あるいは，チュクチ人に混じってアナディル川あるいはアヌイ川沿いを遊牧している。しかし古い時代には，チュワン人はユカギール語を，それも明らかにコリマ方言を話していた。ロシア化したチュワン人であるジャーチコフ氏が，チュワン語に属するものとしてあげたいくつかの単語はユカギール語の単語でもあった[(16)]。彼は更に，言い伝えによれば，チュワン語，ユカギール語，オモク語は似ていると認めている。オモク語については後述する。

18世紀のコサックの報告書数篇において，また19世紀初頭に書かれたコリマ地方行政府の古文書において，しばしばチュワン人氏族がチュワン・ユカギール人氏族とそれ以前に呼ばれていたことをはっきり示す情報を私は発見した。いわゆるホディン人（Khodyntzi）は実際にはチュワン人であった。

ここで，北東シベリア奥地についての民族学の文献に現れる消滅した民族の名について多少述べておくことが必要である。たとえばいわゆるオモク人（Omoki），ホディン人（Khodyntzi），アナウル人（Anauli），コンギエニシ人（Konghienisi）そしてシェラギ人（Shelaghi）は，それぞれ独立の，消滅した民族として言及される。明らかにチュクチ人の一部であったシェラギ人を除いて[(17)]，これらの名はユカギール人の消滅した分派あるいは氏族を意味する。シェ

↙（15）［訳者注］以下、チュワンやオモクなどの民族名は、先行するシベリア民族学関係の日本語訳に見られるものに従う。ただし、コンギエニシとシェラギは今回仮の日本語名をあてたもので、訳者の知る限り先行する例はない。

（16）S. Dyachkoff, The Country of the Anadyr（Г. Дьячковъ, Анадырскій край）. Vladivostok, 1893.

ラギという名の起源はわからないが，この名はコサックのヴィレーギンの報告の中に 1720 年頃に出現する。

コンギエニシ人（Konghienisi）についてザウアーが言及しているが，彼はコサックのトレチャコフから，コリマ川沿いにかつてコンギニ（Konghini）という名の民族が数多く住んでいたという話を聞いている[18]。ディオネオもまたこの民族に言及している[19]。ディオネオは，アヌイ川流域に住んでいたコンギエニシ人が天然痘のためにすべて死に絶えたという伝承をチュクチ人のノーフヴァから語り伝えられた際に，その語り手にチュクチ語の代わりにヤクート語の単語を使わせている。この語り伝えによれば，この謎めいた北極圏の民族コンギエニシ人は家畜を飼う民族であるヤクート人が開催したクミス祭に参加していたようだ[20]。しかし実際には，コンギエニシ人，もっと正確にはコンギエニジ（Kongieni'ji）あるいはコルギエンジ（Kolgi'enji）は，オモロン川流域に住んでいたユカギール人であり，その河口から 100 マイルほどのところで，支流の河口が Kongiensi あるいは Kolgi'enei と呼ばれていた。Kolgienei は単語 Ko'lgel から派生される。Ko'lgel でユカギール人はカラマツで覆われた川岸を示す。Ko'lgienei はこのような川岸のある場所を意味する。この川がそう呼ばれているのは，Kolgel がその川の谷全体に広がっているからだ。ロシア人は Kolgienei を Kongi'ina に変えた。接尾辞 –ji は「男」を意味し，場所名に付けられた場合には「その場所の住人」を意味する。このように単語コルギエンジ（Kolgi'eneji），あるいはロシア人によるその変形コンギエニシ（Kongienisi）（Kolgienei 川岸の住人）が形成された。この川岸は現在誰も住んでいないが，それは現在では消滅した多くのユカギール人の集団が以前に住んでいた他の場

（17）ウランゲルも同じ意見である（Wrangel, Narrative of an Expedition to the Polar Sea in the Years 1820−1823［London, 1844］, p.412）。現在シェラギあるいはエリ岬は海洋チュクチ人が住んでいる。

（18）Sauer, p.25 を参照。

（19）Dioneo（Shkolovsky）, On the Farthest North-East of Siberia; Chap. VI, The End of the Kongienisi（Petersburg）, p.164.

（20）Jochelson, Kumiss Festivals of the Yakut（Boas Anniversary Volume, pp.257−271）.

所と同様である。

アナウル人はアナディル川沿いに住んでいたユカギール人の分派である。彼らは漁師であり，トナカイを持ってはいなかった。アナウル人の一部は死に絶え，一部はロシア人化した。他方チュワン人はユカギール人の一部を成し，トナカイとともにアナディル川，オモロン川そして2つのアヌイ川流域を遊牧していた。私はすでにホディン人について言及したが，ユカギール人氏族を列挙する際に再び彼らについて述べるつもりである。

言い伝えの中でオモク（Omoki）という名で重要な役を演ずる人々は，疑いもなく現在のユカギール人の祖先である[21]。このことはユカギール語によって，現在のユカギール人氏族の名によって，また昔からユカギール人が住んでいた川の近くにある古い地下式の「オモク人の」墓の存在によって十分に証明される。「オモク」は，「氏族」「民族」を意味する語幹 omo の定の主格であり[22]，自身の言語をなお保持しているユカギール人たちは，現在でさえその氏族名の中にオモクという単語を加えている。ロシア行政当局はこのオモクという名を，大バラニハの近くの乾アヌイ川および大アヌイ川流域に住むユカギール氏族に与えている[23]。

現在のところ，オドゥルという民族名は，現在でも自身の言語を保持しているユカギール人の集団だけに知られている。そして，後に見るように，ユカギール語とともにこの名は，コリマ川とインジギルカ川の間にすむユカギール化したツンドラのツングース人に借用された。一方，コリマ川上流のユカギール人は，彼らとオモロン川流域のユカギール人だけが真のオドゥルだと考えている。彼らが Coli'lau と呼ぶチュワン人だけでなく，ツンドラに住むユカギール人も

(21) ロシア化したチュワン人であるジャーチコフは、アナディル地方についての論文の中で、オモク人をユカギール人とは独立した民族だと述べているが、同時にこれら2つの民族の言語の類似も認めている。

(22) ［訳者注］「定」（definite）というのはヨヘリソンのユカギール語文法で使われる独自の用語であり、現代の言語学用語における焦点（focus）とほぼ同様の機能を指す。

(23) ［訳者注］オモク語については、ごく僅かではあるが記録が残されており、ユカギール語と同系であることは現在では明らかである。

また，この単語の意味するところからは除外される[24]。コリマ川上流のユカギール人たちはツンドラに住むユカギール人のことを「アライ（Ala'yi）の人々」と呼ぶが，これはツングース人を意味するものと思っている。オモロン川流域のユカギール人は，ツンドラに住むツングース人と交じり合う以前，アライの人々は彼らとともに１つの民族を成していたという伝承を保っている。ツンドラでは，ユカギール・アライの人々だけでなく Khangai（Xañai）氏族のユカギール化したツングースも自らを Odul と呼び，コヒメ（Kohi'me）という名をコリマ川流域のユカギール人につけている。コリマ川上流のユカギール人は，私の質問に答えて，コヒメという名のユカギール人の氏族がしばらく前にオモロン川流域に住んでいたと話した。しかしオモロン川流域のユカギール人によると，大昔のユカギール人はこの単語をお互いに敬意を表すための用語として用いていたということである。さらに，ツンドラのユカギール人の言うところでは，コヒメというのは一般にユカギール人を指す昔の名であり，オドゥルについても同様であったということである。

インジギルカ川とヤナ川の間にすむツングース化したユカギール人は自身の民族名を，オドゥルであれコヒメであれ，忘却してしまっており，自身をツングース語で「真の男」を示す I'lkonbei, あるいは「直截な, 恐れを知らぬ男」（障害をものともしない勇敢な男）を示すもう一つのツングース語の単語 Du'tki でもって呼ぶ。

ヤナ川とレナ川の間に住むヤクート化したユカギール人は自らを，ヤクート人が彼らを呼ぶのと同じ名，つまり単に「ユカギール」と呼んでおり，自身の民族名として他の名を知らない。

身体特徴―現在のユカギール人（写真 I–VII）[25]は隣接する諸民族, 主にユカギー

(24)［訳者注］ヨヘリソンのユカギール表記はほぼ表す音素の代表的な異音と類似しているが，c で表記される音素の代表的異音はコリマ・ユカギール語の場合［ʃ］であり、注意が必要である。

ル化したツングース人とかなり交じり合っているため，ツングース人と異なるユカギール人の特徴について述べるのは難しい。コリマ川上流のユカギール人およびツンドラのユカギール人の身体計測を行うにあたって，ヨヘリソン夫人は「ユカギール人」という見出しのもとにツングース人や，彼らに交じり，あるいは共に住むラムート人のデータを配置することを余儀なくされた。[26] 両者は一般に通婚しているからである。この理由のため，ユカギール人の主要な身体的特徴について確実なことを述べることはできない。しかし，現在のユカギール人であっても，ツングース人とどこか体格は異なっている。序文で私は，まず第1にその衰退によって，そして第2にユカギール人の集団のいくつかが現在隣接する諸民族に同化しつつあることによって，ユカギール人が民族として消滅の直前にあると述べた。ロシア人と接触を持つに至った北東シベリア奥地の諸民族の中で，ユカギール人は最も悪い状況を経験してきた。この現象の原因については，この本の歴史を扱う章で述べるつもりである。第一印象として，ユカギール人は，衰退しつつある民族であるという印象を与える。結婚は子供をもたらさず，生まれた子でも弱く病気がちに見える。このことは，隣人であるヤクート人の，健康で頬の赤い子供たちと比べたとき，いっそう衝撃的である。身体の発達は遅れている。20歳代の青年であっても時々子供のような外観をしていることがあるし，あまりに早い老いの影が青年の顔に現れることもある。青年の柔弱な外観にも驚く。背丈が低いので，彼らは細い腰をして，ほっそりした，優美でしなやかな体つきである。逆に女性は，たいていの場合，ずんぐりした体格で丈夫な腰つきである。（中略）[27]

次の資料でユカギール人の人口再生産力の概要の一端を示そう。コリマ川上

(25)［訳者注］ヨヘリソンの民族誌には約80枚の写真と数多くの手書きの図版が付けられている。今回の翻訳では割愛した。

(26) Dina Jochelson-Brodsky, Zur Topographie des weiblichen Körpers nordostsibirischer Völker（Archiv für Anthropologie, N. S., Vol.V, p.3）.

(27)［訳者注］原文20ページ下から5行目から23ページ3行目までを省略した。この箇所にはヨヘリソン夫人（Dina Jochelson-Brodskaya、現地調査にも同行した）によるユカギール人の身体計測結果が詳細に記されている。

流のユカギール人の既婚女性 13 人は 32 人の子供を設けた―そのうち 14 人が男の子，18 人が女の子である―女性 1 人あたりの平均は 2.5 人である。1 人の女性が産んだ子供の最大数は 6 人であった。[28] 上述の子供のうち，10 人が幼時に死亡した。つまり，死亡率は非常に高い割合に達する。子供が生まれなかった婚姻についても若干の例をあげる。ヤサーチナ川流域の既婚女性 29 人のうち，3 人（10.3％）に子供が生まれなかった。[29] しかしユカギール人の他の集団では子供の生まれない結婚は，もっと頻繁に生じる。たとえば第 1 アラセヤ氏族（アライ・オモク人）では，9 組の夫婦のうち，4 組（44％）に子供がなかった。雁氏族の 4 組の婚姻のうち，2 組（50％）に子供がなかった。1896 年にオモロン川の河口に住んでいたオモロン・ユカギール人の 6 組の夫婦のうち，4 組（44.4％）に子供がなかった。私は次章の氏族に関する節で，過去 10 年間におけるいくつかのユカギール人集団の全体的消滅について述べるつもりである。かなりの割合の老人の独身男性がユカギール人の間に見出されることも，人口再生産力の衰えを示すものと見なせるかもしれない。この現象は―経済的な理由により―私たちの文明化された社会ではありふれているけれども，未開の民族の間ではほとんど認められないことである。

以上のような民族の死滅の兆候にもかかわらず，ユカギール人の間には高い割合で老人の独身男性が見出される。概してユカギール人は自分の年齢を知らないけれども，租税記録のおかげで，老人たちの大体の年齢を，慎重に照合して確かめることができた。たとえば，ヤサーチナ川地域のユカギール人では，123 人のうち，男性 9 人と女性 6 人が 50 歳過ぎであった。彼らの多くには孫がいて，それら老齢の男性のうち 3 人は外見からどう見ても 70 歳以下ではないように見えた。

(28) これらのデータをコリャーク人の人口再生産力と比較せよ（The Koryak, 本叢書の Vol. VI, p.413）。［訳者注］以下、「本叢書」とは The Jesup North Pacific Expedition のことを指す。
(29) ユカギール人と同居するラムート人のデータも含めた。両者は頻繁に通婚する。

身体感覚―ユカギール人は他の民族の特定の臭いに対して強い嫌悪を示す。ドルガノフは私に，ラムート人，ヤクート人，ロシア人がどのような臭いがするかを詳細に語ってくれた。彼によれば，ラムート人はリス，熊，腐敗したトナカイの肉の臭いがし，ヤクート人は腐敗した魚の肝や牛糞の臭いがするそうだ。そしてロシア人は家を風通しの悪い状態にしておくために呼吸しにくく，その衣服は新しい綿織布のような悪臭がするということである。ドルガノフと私がロシア人の家に泊まらなければならなくなったとき，彼は頭痛がして気分が悪くなった。彼の想像では，屋根が覆いかぶさってくるように思えたという。

ヤサーチナ川とコルコドン川流域のユカギール人は，冬の間は皮製のテントではなく，丸太製あるいは土製の小屋で過ごすのだが，空気が常に新鮮であるようにと，煙突の煙道を閉じることはしない。火が消えている夜の間は，屋内の寒さは屋外と同じくらい厳しい。

自分としては，時折私はユカギール人から発散する臭いにむかむかすることもあった。身体計測をしたり，民話を書き取ったり，他の仕事をする間に彼らに触れざるをえないとき，私は彼らの汗から出る酸っぱい臭いや，彼らの肌着から発散する耐え難い魚の臭いに悩まされたこともある。

ユカギール語には「抱擁する」や「口づけする」を意味する単語（a'mladai および yō'gi）が見出されるが[30]，抱擁や口づけはロシア人から取り入れられたと私は考えたい。たとえば，復活祭の後でユカギール人が顔を合わせると，たとえその出会いが復活祭から何ヶ月か後であっても，彼らはきまって口づけし合う。これはまさにロシア人の復活祭の挨拶の習慣である。子供や女性による愛撫は，嗅ぐ（modi'nu[31]）ことによって表現される。彼らは首筋や顎先の下の部分を嗅ぐが，その匂いはとても芳しいと言う。ドルガノフの言ったところでは，その匂いは女性の胸と乳の，あるいはオームリと呼ばれる魚の卵で作った

(30) 明らかに第 1 の単語は動詞 a'mlai（「飛びつく」）から、第 2 の単語は yō'gi（「彼の頭」）から派生している。

(31) 動詞「嗅ぐ」には modi'nu のほかにもうひとつ普通の表現がある（yo'rulā、「鼻で何かをする」の意味）。

粥を思わせるという。「しかし」と彼は付け加えた，「必ずしも女性すべてが良い匂いがするわけではないが」。

良い匂いは ile'ye と呼ばれ，悪い臭いは pe'ǰel と呼ばれる。ドルガノフは香水の匂いをたいへん好んだ。「私たちの山の草やベリーの花はこんな匂いがする」と彼は言っていた。

ユカギール人の視力については，コリャーク人と同じことが言えるであろう。(32)

ユカギール人は塩なしで過ごすことができるけれども，機会があればいつでもロシア人に少々の塩を請い求める。しかし，塩漬けの魚は好かない。胡椒や辛子のような辛いものも好かない。彼らは魚油，脂，トナカイの髄が好みである。バターは贅沢品と考えられているし，ヤクート人が牛乳から作る他の乳製品についても同様であるが，こちらはユカギール人にとって稀にしか手に入らない贅沢品である。彼らは一般に砂糖や菓子を好み，タバコも好む。パンやラスクもまた珍味と考えられている。ドルガノフは私に，人はパンだけで生きることができるだろうかと尋ねたことがある。彼はいつも大量のパンを一度に詰め込み，気分が悪くなったのである。

「色」を示すユカギール語の単語は，コリマ方言では cu're であり，ツンドラ方言では omgoñ である。

ユカギール人は以下の色を区別する：

	コリマ方言	ツンドラ方言
白	po'inei	n.a'boi
青	lu'boǰeni	to'ronnei
緑	ǰele'neñoi	xomo'nnei
灰色	co'iboi	yari'nnei
茶色	co'iboi	yari'nnei
赤	ke'ileni	n.e'močeni

(32) Jochelson, The Koryak, 本叢書の Vol.VI, p.415 を参照。

黄	ca'xaleni	xomo'nnei
濃紺	lu'boǰeni	xomo'nnei
黒	ebi'bei 或は emi'bei	toro'nnei
暗い青	ebi'bei	toro'nnei

緑という色は，ツンドラ方言では青と区別されないが，コリマ方言ではロシア語から取られた zeleny という単語で表される。[33] ebi'bei と toro'nnei は，黒の他にすべての色の暗い陰を含む。

ある場合には，ユカギール人はある種の色の明るい陰に対して別の単語を使う。たとえばコリマ川上流方言では，paǰleboi は「白っぽい」を，ke'ilenioi は「赤っぽい」を，abi'beoi は「黒っぽい」を示す。

赤，青そして黒は美しい色だと考えられており，服の刺繍に使われる。白い顔，黒い目，褐色の髪，そして黒い眉毛は，彼らが美しさの典型と考えるものである。白い顔とは，ユカギール人にとっては，淡い黄色あるいは薄い褐色のことである。以下は，ある美しい少女をユカギール語で描写したものである：

Puko'le-ti’te　po'inei;　a'njegi　moro'jine　titeme'’i;
雪 - のように（彼女は）白い；（その）目は　スグリの実　のようだ；
A'njepugelbiegi　cori'le　titeme'i;
（その）眉毛は　黒いインク　のようだ；
Manailegi　caxa'leye cuo'lku titeme'i;
（その）髪は 褐色の　絹　のようだ；
Tu'del　yelo'je titeme'i　tāt　o'moc!
彼女は　太陽　のようだ，そんなふうに　美しい！

(33)［訳者注］ツンドラ方言についてのこの説明は上記のデータと必ずしも一致しない。ヨヘリソンはもしかしたら toronnei が「青、黒、暗い青」すべてを表しうることをここで先行して指摘しようとしたのかもしれない。

清潔さ―隣接する諸民族と比べると，ユカギール人はずいぶん小奇麗である。これはある程度まではロシア人との接触によるものであって，その生活様式をユカギール人たちはできる限り真似たのである。彼らは石鹸をありがたがり，請い求める。懐に余裕のあるときには，石鹸を買うことさえもする。若い男女は顔を清潔にし，しばしば体も洗う。体を洗うのは朝である―これはロシア人の入植者から借りた習慣であり，洗い方も同様である。口いっぱいに水を含み，それを少しずつ手の平に吐き出すというやりかたで彼らは顔を洗う。夏には彼らはしばしば川で体を洗う。川の近くに住んでいるユカギール人の大多数は夏いっぱいを岸辺で漁労をして過ごすけれども，こちらは水浴しない。彼らは，樹皮を取り除いたあとの柳からナイフで削り出した薄片を束ねたものを使って，皿，調理器具やテーブルを拭く。この同じ薄片はタオルやナプキンとしても使われる。食事の間，私はいつもこの新しいナプキンを出してもらっていた。ナイフで削り出したこれらの薄片は非常に細くしなやかなので，それで口や手をぬぐっても心地よいし，夏の間は新鮮な柳の薄片は良い香りがする。女性たちは子供の顔を拭くのにこれを使う。ユカギール人は髪を洗わないけれども，髪をとき分けたがり，持ち込まれたロシア製の櫛を手に入れたがる。彼ら自身が手作りした木製や骨製の櫛は，髪に虱がたかっている頭を清潔にしておくにはあまり役に立たない。この害虫と彼らは常に戦っているのだが，彼らはそれでもなお，虱は人間にとって必要であり，健康を具現するものだと感じている。そのため, 私が自分の家には虱がいないと言うと彼らは驚くのだ。「私たちの見るところでは」とあるユカギール人が私に言った，「虱は死の床でだけ人から去っていくのですよ」。

ユカギール人の家では，家族の多くがお互いの頭の虱取りに没頭しているのが見られるかもしれない。私の通訳のドルガノフは，チュクチ人が虱を歯で噛み殺すことに憤慨していたけれども，自分は食事を載せるテーブルの上で虱を殺していた。老年の人々は若者ほど小奇麗ではない。彼らは櫛を使わず，髪はいつも羽根や，トナカイの毛や，炉から出た灰に覆われている。

ユカギール人は，コリャーク人やヤクート人よりも，食物の好みがやかましい。彼らは，後者の人々が使う腐敗した肉や魚を好まない。冬の備えのための漁労は秋に行われるが，この時期の夜の気温は零度以下になるので，魚は冬中良い状態を保つ。夏の間に得られた魚は，すぐに食べてしまう予定の物を除いて，乾燥した状態で蓄えられる。

ヤサーチナ川流域のユカギール人の中には，特に女性の中に，それまでに食べたことのない食物に強い嫌悪を示す者がいる。たとえば女性の中には，牛肉に嫌悪感を持つ者もいる。また飢饉の間，食料のために殺す馬をヤクート人から私が買ったときも，この女性たちに馬肉を食べるよう説得するのは無理だった。あるヤサーチナ川流域の年長のユカギール人の家で私が自分のために牛肉を料理したとき，彼の妻は家から離れていたものだ。ここまでに述べた事実は，ヤサーチナ川とコルコドン川流域のユカギール人に関係することであり，ツンドラのユカギール人や，ロシア人化したユカギール人には関係しない。またヤクート人と一緒に住み，他の民族の食物に慣れ親むようになったユカギール人にも関係しない。

病気とその治療―はしか，天然痘および梅毒はロシア人によって持ち込まれた病気である。はしかは悪質で，子供の命を奪うだけでなく，大人の命も同様に奪う。天然痘に対するユカギール語の名は comoǰe-yo'u（「大きな病気」）である。ユカギール人たちがこれほど恐れている病気はない。なぜならこの病気は民族死滅の主な原因のうちのひとつだからである。まさに天然痘の流行は再三再四，村全体や氏族全体を根絶やしにしてきた。スロフツォフは 1691 年のこととして，「天然痘の流行の中でユカギール人は死に絶えた」と述べている。[34] もちろん民族全体が滅びはしなかった。しかしこのような情報は，ユカギール人がロシア人と遭遇したすぐ後でこの病気によって引き起こされた惨状がいか

(34) Slovtzoff, Historical Survey of Siberia (П. Словцовъ, Историческе Обозрьніе Сибири), St. Petersburg, 1886, p.144.

なる規模のものだったかを教えてくれる。天然痘がユカギール人の間で最近もっとも猛威を振るったのは1885年のことであり，いくつかの場所では人口の半分以上が犠牲になった。たとえば，この流行前に70人の男性を数えていた第一オモロン氏族は，天然痘の流行の間に39人の男性を失った。ロシア人がどのようにこの病気を持ち込んできたかを語るいくつかの伝承がいまもユカギール人の間では語り伝えられている。

最も普及している言い伝えによれば，ユカギール人の戦士が数多く，勇敢だったために，ロシア人の侵略者はユカギール人を打ち負かすことができなかった。そこで敵の数を減らすために，ロシア人は天然痘を箱に入れて持ち込み，ユカギール人の中でそれを開けさせた。すると地表は煙で覆われ，男たちは次々と死んでいった。ヤクート人は，天然痘はロシアの悪霊であり，女の悪魔の形をして彼らの国に入ってきたと考えている。病気の人々がこの悪魔に会うというわけだ。シャーマンでさえこの新参の悪霊の前では無力だ。しかし時々，天然痘の流行している時期に，木にかけた毛皮という形をとってこの悪霊への供物か生贄を捧げると，危機を防ぐこともできるという。

はしかや天然痘が時おりこの民族の多くを殺してきた一方で，梅毒はこの民族を絶えず苦しめている。ロシア人の数が一番多いコリマ川の河口地域で，梅毒はもっとも広がっている。現在でも，この恐ろしい病気が爪跡を残していない家族を見つけるのは難しい。しかし現在見られる事例は主に第3期の遺伝性のものである。ユカギール人は梅毒のことを，「悪い病気」（e'rče yo'u）あるいは「ロシア人の病気」（lu'či yo'u）と呼んでいる。彼らはこの病気を恐れていない。健康な者は，梅毒の影響が住民全体にとってどれほど破滅的であるか理解していないから，この病気に対する予防策を何も講じることはない。それにこの病気は，たとえ個々人にはひどい破壊の跡を残すとしても，痛みを伴わずに進行する。子供が得られない結婚はたいてい遺伝性の梅毒の結果である。

さらにもう1つの病気は，北東シベリアの奥地に，ロシア人ではなく，ヤクート人によって持ち込まれた。ユカギール人が「ひどい病気」（nige'yol yo'u）と

呼ぶハンセン病である。この病気はヤクート人の近くに住むユカギール人が罹患したようである。もっともヤクート人の間にも多い。たとえば 1896 年には，コリマ地区の 3 千人のヤクート人のうち，30 人が（重度の）ハンセン病に罹患しているものと記録されている。

私は文書館でユカギール人のハンセン病患者の記録を偶然見つけたけれども，この症例は医師の認証を受けていなかったので，疑いが残る。

疥癬はチュクチ人やヤクート人には広がっているけれども，私はユカギール人に疥癬を見つけてはいない。ユカギール人は私に，自分たちはこの病気にはかからないのだと語った。もっとも彼らはこの病気の名は持っている― yo'ǰeni である。

ユカギール人の間に広がっている病気の中で，リウマチは第一位を占める。

重要な漁労は，川が凍る前に，秋に行われる。ユカギール人は脚の感覚がなくなるまで，膝まで冷たい水に浸かり，浅瀬に立っていなければならない。これではもちろん，彼らの中に急性あるいは慢性のリウマチにかからない者はほとんどいない。若者の大多数は，脚が冷たい水で腫れ上がってしまうため，秋の間は漁労に加われない。若者たちはそれゆえ，岸辺での作業に没頭することになる。ユカギール人の考えでは，この病気は小屋の外に置き忘れた衣服の中に隠れた悪霊によって引き起こされる。この悪霊は「服の中の悪霊」（nin yu'oye）と呼ばれる。これを恐れて，屋外に干してある衣服，とくにズボンは，晩には屋内に取り込まれる。

ユカギール人は黄疸に対する単語を持っている（caxaledaile「黄色である状態」）。しかし彼らは私に，この病気はヤクート人の間でよく見られるだけで，ユカギール人には知られていないと請け合った。

眼病もまた，ユカギール人にとっては，隣接の諸民族ほど頻度が多くはない。しかし視力を失った老人は稀ではないし，私は眼の炎症や白内障の事例にもしばしば会った。ヤサーチナ川流域の 100 人をわずかに超えたわずかな人口の中で，2 人の視力を失った人―男性と女性―にも遭遇した。

ユカギール人の眼は炉から生じる煙にそれほどひどくさらされてはいない。彼らは一年の大半を遊牧していて，テントで過ごすのはほんの少しの時間だけだからである。冬の間，ヤサーチナ川やコルコドン川流域のユカギール人は，煙突付きの小屋に住む。白内障の起源はユカギール人によって，こう説明されている：早春に，朝から晩まで雪靴をはいて野生トナカイを狩っていると，渇きに悩まされて唇が黒くなる。けれどもほんの少ししか雪あるいは雪穴からの水を口にしなければ，渇きは衰えず，視野が暗くなる。そのあと眼が痛くなり，白内障が発症するのだと。

消化器の病気は，ユカギール人の場合，ヤクート人ほど頻繁には見られない。それは，ユカギール人はヤクート人ほど食いしん坊でなく，悪くなった食べ物を避けるからだ。しかしユカギール人は，魚を食物とすることの結果として，寄生虫に悩まされる。

ユカギール人は時おり，彼らが呼ぶところの nu'tneye ui'čič「臍が（本来の場所から）動く」という発作に襲われる。重い荷物を持ち上げたり，不様な跳躍をしたりしたことによる痛みを彼らはこのように定義する。「臍を（本来の位置に）置きなおす」やり方を知っている「専門家」がいる。この専門家たちは手で痛む位置を圧し，それを臍の方向に押しやる。それからナイフの柄を使い，ねじを回す要領で捻りを加える。そのあと―彼らの言うには―痛みは去る。

インフルエンザ，気管支炎，胸膜炎はしばしば起こる。ユカギール人は冬の間乏しい衣服しか着ていないので，風邪にかかることになるのだ。肺病の患者に会ったことはない。栄養の乏しさと飢饉のため，慢性疾患による不健康状態や壊血病の事例はよく見られる。明らかにこれと関連して，ユカギール人が anā' と呼ぶ，ある種の病的な状態が進行することがある。この状態に悩まされる者は，ものうげになり，無気力になり，眠りがちになる。ユカギール人はこのような病気を，私たちの理解とは異なるが，伝染性のものと考えている。ユカギール人によれば，オホーツク海岸からツングース人によってこの病気が持ち込まれるまでは，彼らはこの病気をまったく知らなかったという。anā' とい

う悪霊が人間の頭の中に住居を築き，眠気をもよおさせる。悪霊は病気の人間の目を閉じさせ，そのあと人間はもはや抗うことはできなくなるのだという。

神経性の病気に伴う頭痛は，後に詳細に述べることにするが，かなりよく起こる。当面，ユカギール人の医学について少々述べることにしよう。

解剖学的知識—ユカギール人は，多かれ少なかれ，人間の体の解剖学的構造について正しい知識を持っており，器官の働きについてもある程度通じている。死んだシャーマンの遺体を解剖し，骨から筋肉を切り離したりする中で，昔のユカギール人には人間の骨格，筋肉の配置，内臓について学ぶ機会があった。血管の命名法から判断して，ユカギール人は動脈と静脈の区別を知っていたと考えられる。つまり彼らは，静脈を「血の道」（le'pun-ču'go）と呼び，動脈を「生きている血の道」（e'ǰun-lepun-čugo）と呼ぶ。心臓は cu'goǰe あるいは cubo'ǰe と呼ぶが，これは「動き」「走り」また「勇敢さ」の意味である。脈は「小さい心臓」（yuku'-čubo'ǰe）と呼ぶ。ある種の器官の働きに関するユカギール人の考えはかなり奇妙なものである。たとえば腎臓（mu'mul）は消化時に胃を助けるものと考えられている。肝臓（kude'ǰe）は人間に眠ることを勧める器官である。それゆえ大きな肝臓を持つ人間は眠気を催している人である。心臓は人体の司令官である；しかし大きな心臓を持つ人間は怠け者で緩慢であり，小さな心臓を持つ人間は生き生きとして活動的である。

病気の治療—ユカギール人はある種の薬草を，必要なときに住まいの近くで見つけられるものならば，医療の目的で使う。それらは蓄えたり持ち歩いたりしてはならない。というのは，そのようなことをする人間はやがてそれを必要とすることになるだろうからである。

anā' という病気の治療は，指を使って，眉毛の間，両方の乳の間，そして背骨の上の皮膚を非常に強く圧する。こうして起こった痛みは自然に，しばらくの間は眠気を退散させる。——眼の炎症は，まつげをペンチ状の物で引っ張る

ことで治療する。――白内障には教会の香をまぶす。――雪盲によって春にまぶたが腫れ上がり，痛みが激しいときには，ユカギール人はまぶたをひっくり返し，anjedu'yiye ule'ge（「眼を良くする草」）と呼ばれる粗い草でこすって出血させ，眼の中に女性の乳を点眼し，それから包帯をして，その人を眠りにつかせる；そのあとで患者が起きると目は良くなっていると彼らは言う。――喉が痛いときにはスグリの葉を煎じる。――咳を鎮めるには，炉に野生のタイムを撒き，その煙を吸い込む。――灸は体に腫れや痛みのある箇所がある場合によく使われる。――傷は，柳か松を薄片に削ったもので覆う。

ユカギール人はロシア人に，進んで薬を求めてくる。彼らはいつも薬を私に求め，あらゆる薬は彼らによく効いた。しかしいくつかの場合には，私の治療は恨まれた。たとえば，咳の治療のため，ヤサーチナ川流域の老人の妻にドーブル散を与えたとき，彼女は恐怖で「要らない！欲しくない！」と叫んだ。

今までのところ，病気を治療する方法として普及しているのは，シャーマニズムの儀式とまじないであるが，これらについてはこの民族の宗教を論じる際に述べる。

ユカギール人の神経症は特に興味を引くため，以下でより詳細に述べることにする。

神経症―コリャーク人についての研究で私は，北東シベリアの「北極ヒステリー」（arctic hysteria）について論じた[35]。ここで私は，より詳細にそれを記述することにしよう。というのは，コリマ川上流のユカギール人の間では，この病気があらゆる形で非常に高い頻度で発症するに至っているからである。非常に興味深いのは，北極ヒステリーが北東シベリアのすべての民族で同様に発症するわけではないと見られることである。一方では，このことは，その民族がどの程度まで順応してきたかにかかっている；たとえば，この地のより古くからの住人に属するチュクチ人やコリャーク人の間ではこの病気の頻度は低く，

(35) Jochelson, The Koryak, 本叢書の Vol. VI, pp.416, 417 を参照。

症状も穏やかである。他方，ヤクート人やツングース人のような新参者の間では，この病気に出会うことがより多く，症状は深刻である。ロシア人入植者もまたこの病気にかかる。ロシア人入植者の場合，この病気の原因は，北極圏の自然―寒さ，冬の暗い昼，夏の明るい夜，そして全体的な単調さ―が人の心に及ぼした心理的な影響のためであると考えられるかもしれない。

他方で，北極ヒステリーの発症は，その民族の生活の様式，およびその民族の食物にかかっている。たとえば，私の観察ではこの病気は，遊牧の習慣を持つ人々の間では，定住する場を持っている人々と比べて，それほどよく起こるものではない。また飢饉の時にはこの病気はより激しいものとなる。たとえば，ツンドラのユカギール人は，皮製のテントだけに住んで，トナカイに乗りツンドラを遊牧しているが，めったにヒステリーに苦しむことはない。彼らにこのことを尋ねた際，彼らは最初，自分たちの間にそのような病気はまったくないと否定した；しかし後になって私は，一度ならず彼らの中でその事例を観察することがあった。ヤクート人，ロシア人入植者，コリマ川上流地区のユカギール人は，多かれ少なかれ定住生活を送っているが，家族の中の誰かが何らかの形のヒステリーに苦しんでいないような場合は稀である。ヒステリーの事例は，食料が不足しているときや，飢饉のあとの時期には特に頻繁に起こり，また激しい性質のものになる。

すでにコリャーク人についての研究の中で，症例について 2 つの主要な形の北極ヒステリーが区別されるかもしれないことに私は言及してきた[36]。若い人々は一方の形のものにかかりやすく，30 代から 40 代以上の中年の人々，特に女性は，より頻繁にもう一方の形のものにかかりやすい。第 1 の種類のものはヤクート人の間で menerik，ユカギール人の間で ca'rmoriel，ツングース人の間では haujan（「悪霊にとり憑かれている」の意味）として知られているものである。その徴候や症状において，これは文明化された国々におけるヒステリーの発作と一般的には何ら区別すべきものではない。その発作はたいていの場合，

(36) Jochelson, The Koryak, 本叢書の Vol. VI, p.417.

成長した少女や若い女性に発症するゆえ，何らかの意味で性的な機能と関係しているのではないかと推測される。若い男性の場合は，ヒステリー発作は主に宗教上の想像の影響が原因であろう。発作はシャーマンになりたいと思っている神経が張りつめた若者に見られる。

ca'rmoriel の特徴は，患者が，男性であれ女性であれ，長い時間歌い続け，患者自身を苦しめる霊が命ずることを歌の中ではっきりと表明することである。この発作の前には，心身の不調を示す徴候―食欲喪失，頭痛，無気力，そして患者の周囲の環境に対する無関心など―が現れる。このような状態が１日から数日続くこともある。突然患者は野蛮人のようになり，あるいは感情の高揚した状態となり，最初は穏やかに，ついで大声で，腕を振り体を揺らして歌いだす。このとき女性は髪を振りほどくだろう。患者はたいてい座った姿勢のままでいる。この将来のシャーマンは歌の中で，自分にシャーマンとして生きはじめることを強い，自分を締めつけ，その呼びかけに従うことに同意しない場合には死をもって脅しつける霊のことを訴える。歌っているのが明らかに患者の中に入り込んだ霊自身であることも時々ある。たとえば，神経の発作に襲われた少女を通じて霊が，新しいハンカチか服が貰えればこの子から出ていくだろう，と歌うのだ。この霊の要求が少女の両親によって満たされれば，もちろん少女はその贈り物を貰い，発作は止む。このような発作のどの程度が見せかけであるか，あるいは自己暗示であるかを述べることは難しい。私が観察した多くの事例のうち, 非常に興味深いものを物語ることにしよう。ある夜私は，犯罪者としてコリマ地区に送られてきた若い男性―ロシア人―と一緒にヤクート人の家で眠っていた。この家の女主人は，見たところはたくましく赤い頬をした女性であったが，この若い男性に好意を抱いた。住む場所として当局があらかじめ指定してあった場所に彼が向かうとき，この若い女性はヒステリーの発作を起こした。発作の最中，女性は自分の気持ちを直裁に語る即興歌を歌った。私は歌詞をヤクート語で書き取った。ここに自由訳でそれを再現すると：

翼のような睾丸のお友達！／　南から，ヤクーツクから来た見知らぬお友達！
しなやかな関節を持って　／　ハンサムな顔と良い心を持ったお友達！
機敏なお友達に会いました！　／　お友達よ，私は決して離れません！

この率直な即興をこの女性は何度も，最初から最後まで2時間あまり繰り返し，ついに深い眠りに落ちたのだった。

発作の間，この女性の夫のみならず，彼女の小さな子供たちもそこにいた。ヤクート人の間では礼儀作法の自由度が大きく，女性も特に貞節だというわけではないけれども，それでも夫というものは嫉妬を感じる。何らかの利益や家族のことを考えて夫が妻の不貞を大目に見るというような場合でさえ，夫は妻の不貞に気付かないふりをするけれども，彼の嫉妬のしるしは観察される。今挙げた事例の場合，夫は妻を愛しており，彼女に嫉妬した。しかし発作の間その夫は，妻の心を誘惑でかき乱した悪霊だけを罵っていた。この発作が単なる見せかけか，それとも自己暗示によって引き起こされたのかを認識するのは難しい。このような行為があったとして，それは愛の感情に悩まされはじめた若い女性のためになるものではない。私には，彼女は何をしているのか，自分では分かっていなかったように思われる。それは，心の中にある愛しい男性の姿の行動によって無意識に引き起こされた身体的反応だったのだろう。

歌の後に痙攣，異常な収縮，あるいはてんかんの発作が襲うこともある。私はこのような発作を一度ならず，コリマ川上流地区のユカギール人の間でも，またヤクート人の間でも観察する機会があった。病気が患者の中に入り込んだ悪霊のせいだということになると，治療法はもちろん，この悪霊を追い出すためにシャーマンを呼ぶことである。

私はすでに，ツンドラのユカギール人が概して，彼らの間に北極ヒステリーが存在することを否定したと述べた。ヤサーチナ川流域のユカギール人はまた，menerik と呼ばれるこの病気の形は，彼らがヤクート人と遭遇するまではユカギール人に知られてはいなかったといった。ユカギール人によればこの病気は，

ヤクートの悪霊によって引き起こされるのであり，それは患者がユカギール語ではなくヤクート語で歌うという事実によって証明されるということである。コルコドン川流域で私は若い女性が，ユカギール語ではなくツングース語で歌うのを聞いた。そのとき，歌を伴った発作の後で，この少女は痙攣に襲われた。彼女の体は弓のように曲がり，腕は動かなかった。私が彼女の腕を取ったときに痙攣は止んだが，彼女は長い間無意識の状態にあった。彼女が回復した後で，大柄なロシア男が「彼女を癒した」のを覚えているかどうかと母親が彼女に尋ねた。覚えている，と彼女は言った。彼女は自分を苦しめた悪魔が男を貪り食おうとしたが，結局できなかったのを見たからである。

ヤクート人が omürax,[37] ユカギール人が i'rkunǰi, ツングース人が ola'n と呼ぶ，もう1つの北極ヒステリーの徴候は，ここまでに記述したものよりもっと奇妙で複雑な性質のものである。ユカギール語の単語 i'rkunǰi は動詞 i'rkei（「身震いする」）の継続アスペクトの形である。[38] そしてまさに，患者がこの形のヒステリーに襲われたことがわかる最初の徴候は，患者の極端な感受性の強さ，恐怖と臆病さの感情である。すでに私は，30代あるいは40代過ぎの人々，とりわけ女性はこの i'rkunǰi（「身震い」）に襲われやすいと述べた。男性の間でこの身震いの事例を見たことはほとんどない。しかし30代，40代，より年上の女性の間では，少なくとも2分の1がこのヒステリーに襲われる。恐怖に対する極端な感受性は北極ヒステリーの徴候の1つであり，その中で最も穏やかなものである。ほんの小さなノック，叫び声，そしてたいていは予期せぬ音に患者は身を震わせ，後ろに倒れる。（中略）[39]

もう1つの北極ヒステリーの徴候，これも「身震い」という用語のもとで現

(37) コリャーク人についての研究（本叢書の Vol. VI, p.416）で私は meriak という単語を使った。これはヤクート語の omürax（omür は「身震いする」の意味）のロシア語発音である。

(38) Jochelson, Essay on the Yukaghir Grammar（American Anthropologist, N. S., Vol. VII, p.404）.

(39) ［訳者注］原文の33ページ24行から34ページ7行までを省略した。この部分にはそのようなヒステリー状態に陥った女性が、自分から思わず性的な含意のある言葉を発してしまったという（精神分析の教科書にあるような）例があげられている。

地の人々に知られているものは催眠現象である。私たちが知っているような催眠術は，ことばによる暗示や人工的な仕掛けによって引き起こされた睡眠状態をいう。単語や身振りにより，被験者の潜在意識においてある種の観念を発動させる間に，催眠術は効果をもたらす。北極ヒステリーでは，催眠術と同様の暗示が，目覚めているときに，完全に意識的な状態で起こる。聴覚印象や視覚印象（後者は人工的な睡眠の暗示では欠けている）が患者の心に作用し，完全に意識的であるだけでなく，自らの意向に反した行為を引き起こすのだ。患者は自分を抑制する力を持たない。そのうえ暗示は，それをかける側では，意図的な場合もそうでない場合もある。動物や自然の力も催眠状態を引き起こすかもしれない。馴染みのないものすべて，視覚器官や聴覚器官を通じて患者の心に打ち寄せるものすべてが，患者の中に反復行為を呼び起こす。患者は自分の聞いた動物の鳴き声や人の言葉を繰り返す；患者はある種の姿勢やしかめ面を模倣し，どんなにばかばかしかったり，こっけいだったり，下品だったり，危険だったりすることでも，指示されたことを実行する。（続く）